
いとしのリリィ

げんたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いとしのリリイ

【Nコード】

N3156Y

【作者名】

げんたろう

【あらすじ】

不運な事故で視力を失い、天涯孤独となり、スポーツ生命も奪われてしまったリリイ。

失意の中、手術のための麻酔を施されたのだけど・・・目覚めたら家族が出来ていました。しかも若返っている！？

テニプリの二次創作ですが、ヒロインに知識はありません。

兄弦一郎や、テニプリメンバーに愛されながら第二の人生を謳歌します！

目覚めると新世界！？（前書き）

二次では初投稿です。

目覚めると新世界!?

「大丈夫だよ、また見えるようになる」

私の手を握る、あたたかい手。

「でも・・・もう試合には出れないのでしょ？」

「リリイ。そんな悲しいことを言わないで。試合には出れないけど、他の喜びだつて見ることができるんだ」

でも・・・試合には出れない。

目に障害を持つ選手は引退するしかないのだ。

物心ついたときから、ずっと心血を注いできたのに・・・志半ばで諦めないといけないなんて。

「君にはボクがついている」

そうね。

でも、代わりにはなれない。

私は見えぬ目を瞑り・・・手術室へ入った。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「！」

「かつ看護師さん！ 娘が目を覚めました！！」
「リリイちゃん！ 私が見える？ ママが分かる！？」

・・・・・・・・・・。

誰？

私の知るママの顔と違うんですが。ちなみにパパも
パパっていうより＜親父＞顔だし、この人。
それに、私のパパとママって死んでるし。

そう。

両親が死んで15年（私が6歳のころだった）。
アメリカに嫁いだ叔母に引き取られて・・・それ以来、ずっとア
メリカ暮らし。

その叔母夫婦とドライブ中に事故に遭って・・・私だけ生き残っ
た。

でも、視神経を痛めてしまって、再手術のために入院していたはず。
・・・ニューヨークで。

なのに、見渡す限り東洋人ばかりって、なんで！？

あわあわしている私に気づいた医者が鎮静剤を打つ。

「もう少し眠らせてあげましょう」

「そうですね。リリイちゃん、ゆっくり眠ってね」

いや、ゆっくり眠るって・・・これが夢なんじゃ??

けれど。

もう一度眠ってみたら、夢をみた。夢の中でも夢って見るの？

その夢では私が、別の人生を歩んでいた。

私は3人兄弟の末っ子。

やっとなまれた女の子に、祖母と母は狂喜乱舞。

祖父や父の教育方針に不安を覚えた二人の意志で、私はアメリカに嫁いだ叔母に預けられた。

そこでやっぱり私は総合格闘技にのめり込んで、ドライブで怪我をして（叔母夫婦も無事でした）

心配した家族に懇願されて日本に戻ってきたらしい。

なるほど。

基本ベースは私のままみたいだし。

元の世界に戻ったところでたいした未練なんてないし。

だから、目覚めたら、あのパパママが居てくれたらいいなと思っていたりした。

神様が願いを叶えてくれたのかな？

目覚めたら、ママと祖母らしき人が居た。

二人ともとても喜んでくれて。

しばらくしたら、パパと祖父。

それから上の兄。

最後に下の兄が来た。

その時、この家族と私って血、つながっているんだなあと思った。

下の兄と私って似すぎ。

黒髪ストレートなところも、目つきが鋭いところも。

ちよっと（？）フケてるところも（涙

そうそう。私7歳若返っていました。

まだ14歳なんだって。ビックリ！

でも既に14歳で成長しきっちゃってるから、21歳と顔は変わらないです。違和感なし。

14歳だったら、色々やり直しもきくだろう。

夢中になれるものが出来るかもしれない。

そう。

私の目はやっぱり完璧には治らなかったから。

もうリングには上がれない。

全米ジュニアでは3位。

全米女子バンダム級では順調に勝ち進んでいたのに・・・。

キックボクシングもやってて。

空手と柔道も頑張ってたのに。

たまにプロの試合に出て。

ブラッディ・リリイって異名まで貰っていたのに。

（皮膚が薄いらしくて良く流血してたのよね）

でも、なんだかくやしから。

趣味範囲でも続けよう。と思った。

「百合。なにか食べたいものはあるか？」

「ヨーグルトが食べたいわ、弦兄様」

「そっそうか！ では売店で買ってこよう！」

下の兄の弦兄様は（こう呼んで欲しいそうだ）、私より一つ上の15歳。

格闘技でもしているのかな？ っていう体格だったんだけど、テニスをしているんだそうです。・・・以外だ。

大和男児を見た目と中身でいって、**「リリイ」**って呼べなくて**「百合」**って呼んでる。

新鮮だし、**「百合」**って名前も可愛いから許す！

そう。私は家族で一番すきなのは弦兄様だ。

皆優しいけど、弦兄様のぶっきらぼうな優しさが好きだし、安心する。

私が少しでも黙っていると**「食べたいもの」**をきいてくる。

私は格闘家で始終減量していたせいか、胃が小さい。だからたまにおねだりすると、すごく喜んでくれる。

今の私の目標は、退院したら弦兄様と早朝ジョギングをすることだ。兄様は毎日走っているんだって。

私も元格闘家。ジョギングは日課だった。

弦兄様にそう言ったら、真っ白のジャージを買ってきてくれた。

私のイメージなんだそうだ。照れるなあ（あっち？じゃ私のイメージ絶対赤だったよね）。

ちなみに。

お祖父様は白いキャップ。

パパは、ランニングシューズ。

お祖母様はきれいなタオル。

ママはストップウォッチ付の時計。

上の雄一郎お兄ちゃんはサングラスを買ってくれた（術後で太陽がまぶしいって言ったから）。

皆優しい。

この家に生まれてよかった！！（あれ？生まれてないんだっけ？）

目覚めると新世界！？（後書き）

真田さんちの子供になりました、リリィちゃん。

リリイちゃんと神の子（前書き）

神の子視点です。

リリイちゃんと神の子

今日は三日に一度の検査日。

はつきり言って憂鬱なんだけど、仕方ないよね。

「うん、特に異常はないみたいだね」

先生に言われてほっと一安心。コレが手術後の三日に一度の儀式。それはちつとも慣れなくて、いつ「異常あり」の一言が出るかと緊張してしまう。

「そろそろ学校に行けそうだね。テニスも思いつきりできる。君のリハビリの様子は聞いているよ」

「全国大会に間に合わせたいですから」

「ははは。君のがんばりが適うように私も協力するよ」

「ありがとうございます」

主治医の先生はいい人なんだけど、おしゃべりが好き。そろそろ帰りたいなーと思っていたのに、先生はさらに話題を振った。

「この間ね、こっちに転院してきた子がいるんだよ。幸村君よりひとつ下だったかな？ 幸村君のときも、「キレカワ系な男の子だなー」って思ってたんだけど、今度の子もすごいよ」

そんなこと思ってたんだ（笑

「すごいんですか？」

「うん。14歳だけど、見た目成人」

そういう意味で『すごい』なんだたら、こっちにも弦一郎っていう奴がいるんだけど？

「雰囲気も大人っぽいし、背も高いし。いい子なんだよー。目を怪我してね。経過入院中なんだけさ。

あの子もスポーツを本格的にやってたみたいで。そこは幸村君と違って・・・もう無理なんだけどね」

・・・・・・そんなヤツが入院しているんだ。

「強い子だよ。今何か必死で探そうとしている。それでね、テニスのこと少し教えてもらえないかな？」

「テニスを？ その子って今まで何をやってたんですか？」

「ボクシングだってさ（正しくは総合格闘技だが、上手く話が伝わらなかった模様）。あんなキレイな子なのに以外だよねえ」

「いえ、俺まだ会ってないんで」

「あ、そうだったね。ビックリするよ。あんなキレイな子そういないから。性格もいいし。なんでもお兄さんがテニスプレイヤーらし

くって、テニスに興味があるみたいなんだよ。幸村君のこと話したら是非会いたいわって」

それって事後承諾ってやつなんじゃ・・・。

「分かりました。これからいいんですか？」

「うん、大丈夫。彼女は経過入院で制限あるわけじゃないから」

「彼女？ 女の子なんですか？」

「そうだよー。リリイちゃんっていつてね。すごくいい子だよ、キレイだし。でもお兄さんがコワモテだから気をつけたほうがいいよ？」

ボクシングが出来なくなったきれいな女の子（14歳）。性格良し

そのキャラクターに俺は興味もあり、彼女の部屋へと訪れた。

白いレースのカーテンがまず目に入った。

品のいい花瓶には真つ赤な薔薇の花。

ベッドに眠るのは、白雪姫みたいな女の子だった。

黒檀のような黒い髪
雪のように白い肌
血のように赤い唇

そんな一節を思い出す。

黒目の多い瞳が開いて俺を捉える。

「・・・だれ？」

「山本先生の紹介で来た、幸村精市。君がリリイちゃんだよね？」

リリイちゃんは身体をゆっくりを起こした。乱れたガウン（白いレースのガウンだった）の帯を締めなおして、再び向き直る。

「寝ているとこ、邪魔しちゃったね」

「いえ。今寝ると夜に眠れなくなってしまうから。・・・初めましてリリイです。わざわざ病室まで来てくださってありがとうございます」

中学二年生だというのに、乱れのない言葉使い。いいところのお嬢さんなのかな？

「とっても強いテニスプレイヤーだって聞きました」

「そんなことないよ。負け無しってわけじゃないしね」

「負けたから弱い、というのは違うと思います。無敗の偉大なプレ

「イヤーなんて聞いたことないもの」

その後、俺は1日に1時間ほどリリイちゃんとの時間を持った。

テニスのこと

勉強のこと

当たり障りのない内容から、次第に自分たちの術後の話までするようになった。

俺は退院したらすぐにテニスに復帰したかったので、毎日のトレーニングは欠かさないでいた。

でも、筋力は明らかに落ちていてそれが腹立たしく、トレーナーが止めるまでトレーニング室にこもっていることも少なくはない。

リリイちゃんは、俺の焦りを感じ取ったんだろう。ある日病室を訪ねると、俺を屋上へ誘った。

屋上にはバケツが3つとたくさんのテニスボール。
リリイちゃんはその一つを俺に放った。

「ラインをマジックで赤・青・黒で塗り分けているの。私が投げるからこれで受け止めてバケツに入れて」

リリイちゃんはそう言って俺にラケットを手渡し、5メートルほど離れる。

「リトルリーグでピッチャーしていた経験もあるのよ？」

そういったリリイちゃんの球は結構な速度だ。90キロくらいあると思う。

俺はラケットでその球威を吸収して、色分けしたボールをバケツに落としていく。球威を落とさないと、バケツに入ったボールは跳ねて戻ってしまうから、けっこう集中力がいる。

「幸村さん、すごい！」

ボールを次々にバケツに落とす俺に、リリイちゃんが間を置かずに次々にボールを放ってくる。

しかも緩急をつけたり、カーブやフォークまで放ってきて、こちらも集中力を切らすことはできない。

「おしまい」

しばらくするとリリイちゃんがそう言った。

気づけばカゴ一杯のボールはもうなくなっていて、色分けされたそれはバケツにキツチリと収まっている。

「・・・うれしいサプライズだったよ、リリイちゃん」

「気分転換出来た？」

リリイちゃんはタオルを俺に差し出す。そういえば汗が顎から滴っている。

「私ね、自宅療養に帰ることになったの」

「・・・そうなんだ。おめでとう」

「あまりおめでたくもないんだけどね。退院してももう無理なもの」

何が・・・と聞かなくても分かる。彼女の入院は交通事故。一番時間のかかった場所は『目』

だから彼女はもうボクシングが出来ない。

「でも幸村さんは可能性あるでしょう？ だから私の餞です。退院まであと一週間ですけど、それまでこの時間の屋上は私と幸村さんの貸し切りにしてもらったの。」

私はテニスのことはあまり知らないけれど・・・動体視力はスポーツマンの必須でしょう？

そのくらいなら協力できますから」

リリイちゃんは俺の手を握った。彼女も運動していたので暖かい手。

「幸村さんにはがんばってほしい」

そしてリリイちゃんは一週間後病院を後にした。

彼女が居なくなつて、連絡先も苗字も知らないことに気づくなんて、本当にあの時はギリギリだったんだな、俺。

個人情報だから先生にも尋ねられない。名前しか（その名前だつて日本人離れしていて、あだ名かもしれない）

（と思う）知らない俺は、もう一度君に会えるのかな？

リリイちゃんと神の子（後書き）

幸村氏の入院時期及び時間は、原作に沿っておりません。ご了承ください。

彼女が訂正しない限り、ほとんどの人物が「リリイちゃんはボクサ
ーだった」と勘違いします。

リリイちゃんと初めてのお友達

「わしのほうが！」

「何を！ ワシのほうが！」

「いや、わしが！」

「いや、ワシのー！」

「あー……。おじいちゃんたち、ちょっと静かにしてもらえま
すかしらあゝ」

「「……むっ」

p i p i p i p i p i . . .

「ブチヨー。携帯なってるスよ」

「む。……すまんな、越前」

宙を舞った携帯をキャッチして、手塚国光は着信を確認する。

<自宅>

とくに困る内容でもないだろう、とそのまま通話に切り替える。

「はい、国光です」

「あ、国光？ おかあさんだけど」

「どうしたんですか？」

「あのね、今日おじいちゃんのお友達が来ているの」

菓子や酒でも買ってきて欲しいのだろうか・・・？

「それがどうかしましたか？」

「ケンカしちゃったのよ」

だからどうした。

「それで？」

「孫自慢が高じてみたいなんだけど・・・国光とそのお孫さんを対決させるって言うててね」

「対決・・・」

「部活が終わる頃にそちらのお孫さんを青春学園の校門に向かわせるからよろしくね」

対決は決定なのか？

ツーツー

言いたいことだけ言って、母の電話は切れた。

祖父の友人とは・・・おそらく立海大附属の真田弦一郎の祖父のことだろう。

対決・・・真田と？ テニスというわけではないだろう。自宅にテ

二スコートはない。

剣道・・・でもないだろう。そちらの道では真田には遠く及ばない。
無難なところで将棋か囲碁あたりか・・・。

なんとも憂鬱な気分を手塚は部活を終えた。

「よし、解散！」

「」「」「あーがっした!!」「」「」

「手塚、今日タカさんちに寄らないかい？」

「にゃー！ 俺も行く！ タカさんちのチラシ食いたい！」

「俺も行っていいっすか？」

「いいよ。皆で行こうか」

「・・・すまないが、俺は遠慮する」

「えー！？ どったの手塚？」

「先約がある」

「さっきの電話っすか」

「ああ。皆で楽しむといい」

「そうだな。次は一緒に行こうな、手塚」

待ち合わせもあり、手塚は手早く着替えると校門へと急いだ。

p i p p i p p i p p i . . .

「はい」

『おかあさんだけど。今どこかしら?』

「もうすぐ校門です」

『そう、良かったわあ。リリイちゃんも着いたみたいなのよ』
「……………」

リリイちゃん?

「誰ですか、それは」

『真田さんところのお孫さんよ?』

嘘だ。

真田家にそんな洋風な名前をもつ人間がいるわけがない。
人間じゃないとすれば……。

「猫ですか」

『なに言ってるの、国光』

「では、犬ですね」

『人間に決まっているでしょう。女の子よ』
「……………」

「私服だからすぐに分かりますわ。声を掛けてあげてね」

ツーツー。

今日の放課後は、自宅で皇帝・真田と将棋（か囲碁）。

だと信じて疑わなかった手塚に衝撃の事実。

とりあえず校門へ急ぎ、門柱に私服の女性を発見した。

黒い長い髪。

日差し避けなのだろうか、サングラス。

白いロングワンピースが髪と一緒に風にそよいでいる。

部活帰りの生徒が皆注目するほど目立つその女性に手塚は近づいた。

「真田リリイさんですか？」

「手塚の知り合い！？」

「すげーな、手塚」

「背高くてすごい美人よね」

「サングラスで顔わかんないじゃん」

「目見えなくても分かるよ、スタイルもいいし、絶対美人だって！」

「手塚やるなあ。年上の恋人？」

「見た目つりあってるじゃん」

なんだか背後がさわがしいが、無視の方向。

「はい。手塚国光さんですか？」

「ああ、待たせてすまなかった」

真田の妹Ⅱ年下と判断し敬語は避けた。

「初めまして。祖父がお世話になっていきます。真田リリイです」

「こちらこそ。手塚国光だ」

「君の兄とは試合で逢うこともあるが、妹が居るという話は聞いたことがなかった」

「一才足らずでアメリカに渡ったので、兄妹として暮らしてからまだ日が経っていないんです」

「込み入った理由があるのならば・・・」

「いえ。隠すほどの理由ではないんです」

といって語ってくれたアメリカ行きの理由は・・・。

語るのがちょっとアレな、出来たら隠しておいたほうが良いと思われる理由だった。

が、帰国の理由は彼女の今後の人生にもかかわるもので。

日差しのためかと思っていたサングラスを見て、ほんの少し胸が痛んだ。

「君は将棋は強いのか？」

「・・・将棋、ですか？」

「ならば囲碁だろうか」

「チェスなら出来ますが」

「そうか・・・。チェスは俺のほうが素人だ」

一体あの二人は何で勝負させるつもりなんだ？

その後。

チェスのルールや将棋のルール。囲碁の奥深さなどと話したり。

『真田の帽子』の事実などを聞いているうちに自宅へたどり着いた。

「まあゝまあまあまあゝゝ！！ ようこそいらっしやい、リイちゃんよね！！」

母親の奇妙な挨拶を受けた彼女は、案内されるまま祖父の部屋へ。俺は着替えてから行くことにして、自室へ向かった。

着替えて部屋を出ると

「すっごい美人さんねゝ。真田さんちのリイちゃん。おかあさ

ん、ビックリしちゃったわあ。国光はビックリしなかった？」

「別に・・・」

名前には驚いたが。

「いやだわあ。沢のモノマネ？ 似ていないし、古いわよ、国光」

別にまねしたわけではないが・・・（そもそも沢とは誰だ）。

そのまま母と一緒に祖父の部屋に行くと・・・。

「実に無念だ！」

祖父の叫びが聞こえた。

扉を開けてみると・・・祖父が肩を落とし、真田家の祖父がふんぞり返っていた。

「おお、国光か・・・。うむう」

孫の顔をみて顔をしかめないでもらいたい。

「はっはっは！ わしの勝ちじゃな！」

「なにを！ お前にリリイちゃんのような隠し孫が居ると知っていたら勝負せなんだわ！ 弦一郎君であれば、国光の圧勝であったものを・・・！」

「負け犬の遠吠えじゃの。それに弦一郎と国光君ではいい勝負じゃ」

「いや、弦一郎君であれば、ワシの国光のほうが」

「いや、弦一郎だって！」

「いやだから」

「だからもなにも」

「おじいさんたち、ケンカはもう辞めてくださいねえ？」

「・・・はい」

「一体なにがあつたんだ？」

「さあ。私も自己紹介したからですから」

彼女が自己紹介しただけで、祖父が負けを認める俺の欠点とはなんだ？

「孫自慢じゃよ」

「そう。孫自慢じゃ。真田のクソジジイが『ワシの孫は・・・』などと自慢してくるもんでな。ついつい『わしのところの国光も・・・』なんて言い返してしもうての」

「「どっちの孫が可愛いかな勝負することになったんじゃ」」

「まあ。それじゃあ、国光が負けても仕方ないですわね。女孫と男孫じゃ可愛さレベルが違いますもの」

母の言葉になんとなく、彼女を見た。

室内のため、サングラスは外している。

切れ長の目は兄に似ているが、黒目勝ちなところと長い睫毛はやはり女子なのだな、と思わせる。

否、クラスの女子とは全く違う。

見下ろすほどのクラスの女子とは違い、目線をほんの少し下ろすだけでいい高身長。

手足が長く、頭も小さいので、私服だけでなくあれほど目立ったのだと気づく。

そして・・・美醜に重きをおいているわけではないが、美人だ。

「いいのう、真田。わしもリリイちゃんのような孫が欲しいわ」

「やらんぞ、手塚」

「数日国光と交換せんか？」

「まあ、いい案ですわね、お義父さん！」

賛同するな、母さん。

「国光くんはいい子じゃが、リリイちゃんとは交換できんのう。・・・

・弦一郎なら」

「いや、弦一郎君は結構じゃ」

「私も遠慮しますわ」

皇帝も形無しだな・・・真田。

「あ！　そうですわ、お義父さん！！　いいこと思いつきましたわ」

「なんだね？」

「リリイちゃんが国光の彼女になればいいんですよー！」

「何！？」

「そうだわ」。どうですか真田のおじいちゃん。国光は真面目だし、生徒会長だし、スポーツ万能だし、間違って

も女の子に手をあげたりしないし、奥手で純情だから浮気もしない

と思うんですけど」

「むっ！」

「考えてもみてくださいよ。国光以外の男の子がリリイちゃんの彼氏になつたりしたら・・・。絶対に国光より顔も悪くて成績も悪くてスポーツもできなくて、ひよつとしたらリリイちゃんを叩いたり、浮気したりするかもしれないですよ？」

「そそそそんな男は叩つ切る！！」

「でしょう。だから国光がいいわよ、リリイちゃん」

だからとは何だ。

「そうだな。リリイちゃんに恋人が出来るなど考えただけで虫唾が走るが、国光君なら合格だ・・・ワシは反対せん」

「リリイちゃんが国光の彼女になれば、わしの孫も同然じゃな」

「私の娘も同然ですわねー」

本人を無視して話が展開している中、彼女が口を開いた。

「お祖父さま、そろそろ帰らないとお祖母さまにしかられてもかばつてあげませんよ？」

「むっ！・・・おいとまするか」

「はい。長々とご迷惑おかけしました」

「リリイちゃん。わしのことは国一おじいちゃんと呼んでくれてか

まわらないよ」

「私も彩香おかあさんって呼んでほしいわ」

「……すまん」

玄関まで見送る際、祖父と母の奇行をとりあえず謝った。

「まだ帰国したばかりで友達も居なくて……。今は恋人よりお友達が欲しいんです、私」

「そっそうか！ では国光はリリイちゃんのお友達じゃ！」

「そうね！ 日本ではじめてのお友達ね！」

「……お友達になってくれますか？ 国光君」

これだけ二人に気に入られて『手塚さん』とも呼べなくなった彼女が、俺の名前を呼んだ。

「ああ、よろしくたのむ」

そうして、手塚国光は、真田リリイの『日本ではじめてのお友達』になった。

リリイちゃんと初めてのお友達（後書き）

確か真田家と手塚家の祖父は知り合いだったはず。

あと、ペアプリ以前に書いたものを転用しているので、真田兄は独身設定です。よってガックンに似た甥っ子は登場しません。ご了承ください。

リリイちゃんの救世主伝説（前書き）

もともとはハイキックで書いていたのですが、頭突きに変更。
ハイキックと頭突きってどっちがインパクトありますか？

リリイちゃんの救世主伝説

その人は白いジャージを着た救世主だった。

ヴァイオリンのレッスンが終わった、平日の21時。いつも迎えに来てくれる母が不在の為、地下鉄で帰ろうと繁華街を小走りに走って居たとき、通行人の一人と肩が触れた。

「あ、すいません」

「つてえなあゝ！」

ギロリと俺を睨んだのは・・・どこから見ても、真正正銘「チンピラ」風の男だった。

マズイ、と思ったのが顔に出たのだろう。男は俺の頭から爪先まで舐めるように見た後、ニヤリと笑った。

カモと判断された俺は、路地裏の人気のない場所でネチネチとイチヤモンをつけられていた。

「邪魔」

「ア”ア!?”」

メゾソプラノの声が路地裏に響いた。

堂々と言つてのけたのは、俺とさほど年は変わらない少女。

白を基調としたジャージが夜の繁華街に鮮やかに浮き上がっていた。

「なんだ、えらい別嬪なお嬢ちゃんじゃないか？ いい店紹介してやろうか？ 小遣いかせげるぜ？」

「No、Thanks。」

女の子はニツコリ笑うと、手を伸ばしてきた男の腕をぐぐり抜け、胸倉を掴むと見事な頭突きをかました。

「あつぶねえなあゝ。そんな場所通るからだぞ、激ダサだぜ！」

「穴戸の言うとおりやな。高いヴァイオリンもって歩いとったら力モと思われても仕方あらへんで。タクシーで帰り」

「にしても、格好いいじゃん、そいつ」

「バカ野郎。チンピラを頭突き一発で倒せる女が、ただの「格好いい女」なわけねえだろ。・・・もう近寄るな」

跡部がズバリと鳳にクギをさした。

「で、でも！ お礼だけは言いに行きたいんです！」

ヘタに係ったらテニス部に迷惑がかかるし、どう見てもヤバい人だし・・・怪我したらテニスが出来なくなるし・・・一体どうしたらいいんだろう？ と思っていたとき、颯爽と助けてくれた人だ。

俺を助けたことで、迷惑がかかっていたりしたら・・・と考えるとやっぱり一度逢ってきちんとお礼を言いたい。

そう跡部さんに言つと「・・・仕方ねえな」と納得してくれた。ただし、氷帝テニス部レギュラー全員で行くことが条件。

「部員が世話になったことだしな。俺からも礼を言わねえと筋が通らねえだろ」

「跡部の台詞、ヤーさん臭いわ」

白いジャージ

黒髪ストレート

すごく美人

すごく強い

彼女の特徴を聞かれてそう答えると「そんなんに分かるわけねえだろうが！」と跡部さんに怒られた。

が。

「ああ、そりゃリリイちゃんだわ」

「リリイちゃんじゃないかな」

「リリイちゃんしかいないでしょ」

あのあたりで聞き込みをすると、「リリイちゃん」という名前が浮上した。というか、彼女の名前しか出てこなかった。

「こりゃリリイちゃんて間違いないんとちゃう？」

「すげー有名人じゃねえのか、そのリリイちゃんとかいうやつ」

「この先のボクシングジムに居るらしいね。居てくれればいいけど」

リリイちゃんがよく来るといふボクシングジムで、俺たちはまた躊躇することになる。

だってボクシングジムだよ？ 怖そうな人がたくさんいそうじゃないか！

でも、跡部さんは流石と言うか……ためらうことなくジムの扉をくぐった。

「ここに『リリイ・チャン』とかいう留学生はいるか？」

高らかに跡部さんはそう告げ……。しばらくの沈黙後爆笑が起こった。

「リリイ・チャンって誰のことだよ、おめえ」

「久しぶりに笑わせてもらったぜ、お坊ちゃんぼい見た目のクセして楽しいやつだな」

「リリイさんは留学生じゃねえよ！ ホレ、これ」

練習生のボクサーが一枚のポスターを指差す。

少し古い・・・雑誌の付録のような折りたたまれた跡のあるポスターには、見覚えのある彼女が映っていた。

「あ、彼女ですよ跡部さん！」

俺が声を張り上げると全員がそのポスターに視線を向けた。

「これは・・・」

「え？ こいつなわけ？」

「こりゃまた・・・」

「・・・ウス」

「あゝん？ Bloody lily だと？ ぶっそんな名前だな」

ファイティングポーズで睨みを効かせた少女（？）の写真にはたしかに「Bloody lily（血まみれの百合）」と書かれバツクには血しぶきが散っていた。

「リリイちゃんの試合は、よくリングが血まみれになったんスよ」

なんでもないことのように言っけど・・・それって彼女が怪我するってこと？それとも逆のことなのかな？

「ともかく、リリイちゃんはしばらくはここには来ないぜ？ 無理言って神奈川から来てもらってただけどよ、あっちにも都合つてもんがあつからな」

「かわいそうな話ですよ」

「俺らも他人事じゃねえよ」

「・・・っス」

練習生たちはボソボソと暗い顔で言っていたが、「んなわけでリリイちゃんは居ねえ」と話を打ち切った。

「あの一件はリリイちゃんに聞いているぜ。シロウトに手出しするチンピラはクズのクズだ。きっちり事務所に話つけたし、俺らもトレーニングを兼ねて見回りすつからよ。坊ちゃんも気をつけな」

「は、はい。それで・・・彼女にどうしてもお礼を言いたいんですが、どうにかして連絡はとれないでしょうか？」

「リリイちゃんは、気にしないと思うけどなあー・・・。どうしてもっつうんなら神奈川の支部に行けば会えると思うぜ？」

あっちの所属だしな」

そして神奈川のジムの住所を教えてもらい、俺たちは神奈川に向かうことになった。

跡部さん曰く「今日中に片付けねえとスツキリしねえ」らしい。

「わざわざ来てくださって、かえって申し訳ありませんでした」

俺の救世主は白雪姫のような人だった。

白い肌。黒くて長い髪。ほんのりと赤い唇。

きているのはドレスじゃなくて白いジャージで、手にはパンチンググローブ。後ろには野次馬と化した強面ボクサー達。

「リリイちゃん、このボーヤ助けてやったのか？」

「ふーん。チンピラに絡まれそうな顔だなあ」

「良かったな、ボーズ。リリイちゃんが通りかかって」

「中学生だあ！？ デカイなあ坊主」

口々にそう言う彼らは、顔は怖いけど悪い人じゃなさそうだ。

「本当にあの時は有難うございました」

「気になさらないでください。あの時は本当に災難でしたね」

本当にボクシングをやっているんだろうか、と思うくらい穏やかな話し口。

「俺からも礼を言わせてくれ。部員が世話になった」

「・・・貴方は？」

「東京の氷帝学園のテニス部部長の跡部景吾だ」

「アトベさん？ ああ！ 真田リリイです。お噂は兄から伺っております」

「・・・・・・兄？」

跡部さんが、いぶかしげな声を上げた。

「真田・・・ってことはもしかして真田弦一郎の、妹か？」

妹！？

真田さんは跡部さんと同じ学年だ。その妹ってことは、リリイちゃんって俺と同じ年か、年下！？

宍戸さんや、忍足さんも驚いている。

そのくらいリリイちゃんはオトナっぽい。俺と同じクラスの女子とは雰囲気から違うし。

でも、真田さんも貫禄があるし・・・血筋ってことなのかな。

「真田に妹が居るとは初耳だ」

「兄も数ヶ月前までは知らなかったことですから」

「・・・なるほど」

跡部さんはどうしてか納得したようだった。

「お前の兄とは因縁があるからな。妹なら逢うこともあるかもしれねえな」

「では、またお逢いしましょう」

「ふっ、そうだな。おい帰るぞ！」

跡部さんの一声でメンバーはジムを後にした。

「跡部、何が『なるほど』やねん」

忍足さんが俺の疑問を代弁してくれた。

「あーん？ わからねえのか？」

「わからんわ！」

跡部さんはチツと舌打ちをして『下手言われるよりはマシか』と呟いた。

「東京のジムのポスター。あれは日本のものじゃねえ。おそらくアメリカだ」

「そっぴや日本語じゃなかったな」と向日さん。

「小学生や中学生の女子ボクサーなら少しは話題になりそうなものやしな」とは忍足さん。

「ボクサーたちが言ってただろうが『他人事じゃねえ』ってな。ボクサーが他人事じゃねえことつつたら、目だ」

「目？・・・網膜はく離か？」

「他にもあるがな。真田の妹はもう試合には出られねえはずだ。数ヶ月まで存在すら知らなかった家族の居る日本に来た理由もそれだろう」

そっいえば「兄『も』数ヶ月前までは知らなかった」と言っていた。

「以上だ。」

unnecessary こと言っ て恩を仇で返すようなマネをするなよ」

「了解。・・・なるほどな。いわれて見れば納得やわ」

「ボクシングやってるけど、試合は出来ない・・・？」

「ラケット振っていいけど、ボールを打っちゃだめだってこと？」

「似たようなものだな」

満足に出来ないのに、ああやってボクシングジムに顔を出しているのか・・・。

あの夜に見た、白いジャージのリリイちゃんを思い出した。

リリイちゃんの救世主伝説（後書き）

氷帝メンバーも勘違いをしています。リリイちゃんはボクシングの試合にもですが、本業は総合格闘家です。

ボクシングで頭突きは反則です。・・・総合格闘技でもだっけ？（試合で頭突きしてみたことないような？）

リリィちゃんとはじめてのテニス部（前書き）

テニプリで一番柳が好きです。

リリイちゃんとはじめてのテニス部

黄金週間。いわゆるゴールデンウィークである。

術後や転入の関係でリリイちゃんは二学期まで学校には通えない。
が、兄である弦一郎はそうではなく、彼女はニユースでゴールデン
ウィークを知って以来、兄の長期休みを心待ちにしていた。

「すまん、百合。連休中も部活はある」

「・・・・・・・・・・」

リリイちゃんが兄・弦一郎と口をきかぬままGWに突入した。

「もうだめかもしれん」

「そうか」

「今朝こそは思ったが、視線も合わせてくれなかった」
「そうか」

「俺は『好かれている』という事実には胡坐をかいていた」

「そうか」

「連休全部が合宿でないのが幸いだった。連休最終日は百合にとことんつきあうつもりだ」

「そうか」

「なんの話っすか？」

「さあ？ 最初っから聞いてっけど、さっぱりわかんねえ」

赤也に聞かれて、ガムを膨らましながら返事をするブン太。

「真田君が苦悩しているようですが？」

「・・・『百合』って女の名前が出てたぜ？ 信じられねえけど、

真田のカノジヨの話じゃないのか？」

「・・・それは有り得ない」「・・・」

「おおかた、近所のネコか犬じゃろ」

「つまんねーけど、そうなんじゃね？」

「そっすよねー。副部長にカノジヨとか、有り得ないっすよねー」

「本当に有り得ないって言える？」

肩に掛けたジャージをなびかせて（なぜ落ちないのかは立海の七不思議）、我らが部長・幸村が発言し

た。

「だって…有り得ないっすよ」

「100%とは限らないじゃないか。『あばたまえくぼ』『割れ鍋に綴じ蓋』『蓼食う虫も好き好き』とか言っし」

「幸村君…それは真田君にあまりにも失礼では…」

「だからさ。『百合』ちゃんを呼べばいいんだよ」

幸村はウキウキと提案した。

「ネコとか犬なら休憩時間に構わせればいいし、それはそれで愉快だし。ひよっとして女の子が来たら、この先一生モノのネタじゃないか」

「…退屈なんですね、幸村君」

「うん」

「ま、面白そうじゃのう」

「だろう？　じゃ、オレさっそく言ってくるから」

そういつてジャージをなびかせながら（やはり落ちない）、真田と柳の元へ向かう幸村。

立海三強はしばしの会話後、柳がどこかへ携帯電話で連絡を入れ始める。

「電話ってことは、人間なのか？」
「飼い主ってことも有り得るぜよ」

そしてしばらく後、立海のテニスコートに現れたのは黒髪ロングヘアにサングラスの女。

「はい！」

「なんですか、切原君」

「俺は、あの女の人が持っている紙袋の中に『百合』が居ると思います」

「小動物、ということですか」

「小動物に好かれる真田か……。気持ち悪いのう」

「普通に考えればあのサングラスの女の人だろうが」

「だって、あんな美人に好かれている副部長とか、有り得ないっす！」

「・・・お前、それ妬み入ってないか？」

「確かに美しい方ですね」

「『百合』の正体はわかんねえけどよ。真田と知り合いなのは間違いないんじゃないか？ 来たんだし」

「みんな、推理は終わったかい？」

幸村がニコニコと近寄ってきた。

「幸村君は彼女のことは聞いているのですか？」

「オレ？ お楽しみは後のほうがいいかなって、まだなんだよね。サングラスで顔は分からないけど、間違いなく美人だよな。」

「・・・フフフ。彼女が弦一郎の彼女とかだったら、ちょっとキレるよね？」

さあ、行こうか。と幸村はビクつくメンバーを引き連れてサングラスの女の元へ向かった。

「部長の幸村といいます」

幸村の挨拶に、サングラスの彼女がサングラスを外そうとした

「そのままでもいいよ。眩しいだろ？」

「・・・・・・幸村君？」

「うん。久しぶりだね、リリイちゃん」

「え！？ まさかの泥沼っすか！？」

「リリイって誰だよ。百合じゃねえのかよ・・・」

「丸井くん！ 敬称をつけたまえ」

「幸村と真田を手玉にとっとるのか？」

2人の会話に他のメンバーがざわつく。

「この学校だったんですね」

「俺も君が来るなんてビックリだよ。弦・・・真田が『百合に嫌われた』って泣き言言ってたから呼び出したんだけど・・・」

「・・・本当ですか？」

「ほら、あそこで君が来たことにも気づかないで落ち込んでいるし」

指差す場所には、暗いオーラを背負った真田。

横ではやはり無表情な柳が相槌をうちつつノートにペンを走らせている。

「真田――！ 来たよ、彼女！――！」

幸村が叫ぶと、真田がバツと顔を上げた。

「ゆっ、百合――！」

ドドドドドド・・・と土煙を立てて走りよってくる真田。ちょっと怖い。

「・・・」

「・・・ゆ、百合。まだ怒っているか？」

フルフルと顔を横にふる『百合』

「お、俺が悪かった。部活と言っても夕方には終わる。それからでいいなら、お前に付き合える。中学生であるから、夜間の外出は出来んが、家でならっ」

「家とかいやらしい」

「夜になにするつもりっすか、副部長」

「いいえ。私わがままだったの。テニスを大切にしているって、分かっていたのに・・・」

「テニスは大事だ。だが、お前のことも大事だ！」

「・・・なんだか居たたまれませんかねえ」

「真田ってこんなに熱いやつだったか？」

「ごめんなさい、弦兄様」

「・・・百合!!」

「「「にいさま?」「」」

「丸井先輩、『にいさま』って兄弟のことっすよね」

「『にんたま』なら忍者だけだな」

「真田が忍者とか、怖すぎじゃろ」

「真田君はどちらかといえば武将ですね」

「武将でも忍者でも怖えよ」

「何、現実逃避しているんだい、皆。大事なのはそこじゃない」

幸村が言った。

「真田が妹の存在を隠していたことが問題なんだよ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・柳？」

ポン、と幸村が柳の肩を叩いた。

「柳も同罪だよ」

「待て、話を聞け。弦一郎は妹の存在を隠していたのではない。忘れていたのだ」

「普通忘れないだろ」

「普通じゃなかった、ということだ。彼女は一歳足らずでアメリカに渡った。日本に戻ってきたのはつい最近だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ようするに。弦一郎の母親が、弦一郎みたいに成長するのを恐れて、海外在住の自分の妹に彼女を預けたってこと？」

「そうだ。弦一郎はあまりにも幼かったため、彼女のことを覚えていなかったのだ」

「ふーん」

『ふーん』ってアンタ！

「顔はそこそ似ているけど、性格は全然似ていないね。弦一郎のお母さんの判断は正しかったってことになるのかな？」

「・・・彼女の性格は総合的にいえば、フレンドリイだ」

フレンドリイな真田・妹

「フレンドリイって、俺英語に強くないから自信ないっすけど、人懐っこいとかそういう意味っすよね？」

「お、おう？ 昭和っぽいとか武将っぽいとか、そういう意味はねえよな、柳生！？」

「あ、ありませんね」

「しかし、大人っぽいのが。真田の妹っちゅうことは、14才以下じゃろ？」

「「「「「「！」「」「」「」」」」」」

「や、やっぱり副部長の妹っすよ！ サングラスとったらおばあちゃんなんすよ！」

「それは言いすぎだろい。真田がおっさんなんだから、おばさんだろ」

「丸井君！ 女性に失礼ですよ！」

「おばさん顔の中学生でフレンドリイとかキッツイのう」
「・・・うつ」

「さっきから何を勝手なことを言っておるのだ!!!」

とうとう真田の雷が落ちた。

「兄様、落ち着いて」
「だが！ お前のことを好き勝手に言いおって！ ゆるせん！」
「元はと言えば、私が拗ねてしまったのが原因だし。このサンングラスじゃあ仕方ありません」

そういつて『百合』はサンングラスを外した。

赤也とブン太が目を瞑る。ジャツカルは及び腰だ。
他のメンバーは興味津々で素顔を見た。

まぶしいのか潤んだ黒目がちの瞳。
長い睫

切れ長の目じり。

ベースは真田に似ているが、真田のようなフケ度ではない。

13・4歳には全く見えないが、「大人っぽい高校生」くらいの範疇に納まる・・・まごうことなき美女レベル。

「あれ？ 美人つすよ？」

「え？ フケてねえの？」

「けしからん！！！」

真田が赤也とブン太にゲンコツを入れた。

「やっぱり兄妹なんだね、目元が似ているよ」

「お兄ちゃんに似ず、フケなくてよかったのう」

「眩しいのでしたら、気を使わずサングラスを着用ください」

ありがとうございます、と彼女はサングラスを再びつけ、紙袋を差し出した。

「差し入れです」

「ありがとう、リリイちゃん」

幸村が受け取り、二人はしばらく見つめあう。

「「「「「なにこのへんな雰囲気」「」「」「」

「弦一郎は『百合』って言ってたよね？」

「あれは弦兄様専用のあだ名みたいなものです。外来読みは照れるらしくて・・・」

「そうなんだ。ってことは、真田リリイちゃん？・・・やっとフルネームが分かった」

「はい。ゴールデンウィーク後に編入試験を受けて、合格すれば2年生になります」

「もともと何処にいたの？」

「アメリカのニューヨークです」

「じゃあ、英語ペラペラなんだね。同じ年のその赤也は英語がダメダメだね」

「今、関係ないじゃないっすか！！！！」

「私も恥ずかしながら古文がダメダメです」

「あはは。安心していいよ。赤也とその丸井もダメダメだから」

「「関係ないだらうい（っすよ！）」」「」

リリイちゃんはクスクスと笑った。

「弦兄様のお友達は、楽しい方が多いのね」

「む・・・」

「お邪魔でしょうし、私はこれで失礼いたします。今夜は兄様の好きなものを私が作りますね」

「弦一郎の好物は焼肉だから、腕の奮い甲斐がないよね」

「真田ん家、今日焼肉かよ。いいなあ」

「同感っす」

そしてリリィちゃんとテニス部の出会いは無事に終わった。

その後、ちよくちよく幸村が真田家を訪問したり、仁王がリリィちやんの話題を振って真田をからかったりなどの変化はあったが、彼らとは良好な関係を結べたと言える。

リリイちゃんとはじめてのテニス部（後書き）

柳が二次元に居たら、魂を売り渡してもいい。好みすぎます。中学生なのに。

リリイちゃん、女帝になる

リリイちゃんは兄・弦一郎の弁当を持って立海大附属中学校へ向かっていた。

真田が忘れたわけではない。

家電製品の悲劇というやつだ。

夜に停電があつたらしく、タイマー炊飯していたのに朝から稼動しなかったのだ。

真田は学食で済ます、と言ったのだが「お冷ゴハンが残っちゃう！」と母が嘆き「じゃあ、私が配達します」とリリイちゃんが立候補した次第。

待ち合わせは12時30分。校門前。

兄・弦一郎が門に来てくれる予定だ。

昨晩に停電があつたことで炊飯できなかったこと。

その日が立海の委員総選挙日であつたこと。

偶然である（断言）。

「へえ、リリイちゃん来るんだ」

「ああ、悪いから断ったのだが、散歩ついでだと言ってな」

幸村が好奇心に目をキラキラと輝かせながら柳を見る。

「ねえ、とてもいいことを思いついたんだけど？」

「奇遇だな、幸村。俺もだ」

「じゃあ、許可を学校に貰わないといけないね」

「二学期からリリイちゃんも、この学校の生徒だ。先生方も許可してくれるだろう」

「……何の話だ？」

委員総選挙がある今日のメインイベントはミス・ミスターコンテストである。

選ばれた男女は、親善大使として各学校に派遣されたり、いろんな催し物のプレゼンターなどをこなすことになる。

男子はミスを選び、女子はミスタを選ぶ。

得てして、男の選ぶ女というのは、女子の「嫌いなタイプ」であることが多い。

今回の当選確実といわれている、ミスター立海は幸村。
女子は山代がかたい、と言われているのだが……これまたステレオタイプで「女子の嫌うブリッコタイプ」なのだった。

幸村もこの手の女子を大いに嫌悪しているので、一緒に選ばれるのは金を詰まれても遠慮したいと思っていた。
いざとなったらミスタの権利を返上しようかなーと思っていたところに、お気に入りのリリイちゃん訪問である。

リリイちゃんなら大歓迎。

「リリイちゃんの推薦人には俺がなろう。彼女はボランティア活動にも熱心だし、容姿も山代を遙かに上回っている。冷静に考えれば彼女のほうがふさわしい」

「うん。俺も冷静に考えるように、全校生徒に言っておくよ」

そうして幸村の希望と柳の手腕により、リリイちゃんのミスコンへの参加は、本人の意思には関係なく決められつつあった。

真田リリイ 二学期に二年に編入予定。

身長176センチ、体重55キロ

趣味は特技は総合格闘技。全米ジュニアボクシング女子3位の実績有り。

昨年度の「ジュニアアスリート50選・全米版」にランクインするオリエンタルビューティ。

現在は編入に向け、勉強をしつつ老人ホームでのボランティアを日課としている。

ガールスカウト、ブートキャンプの経験アリのスポーツ万能な帰国子女。

日本語・英語のほかに、広東・ドイツ・フランス語の日常会話が話せる。

現在はスペイン語を取得中。

事故により総合格闘技より引退。帰国。

「こんなものだろうか」

「・・・こんなもんつつうか、ミス日本にも選ばれるレベルじゃないっすか、コレ」

「ミスつつうよりミスタっぽくないか？」

「リリイちゃんてすごかったんだな」

「これで山代が選ばれたら八百長じゃなか？」

「おい、何故百合がミスコンにエントリーされるのだ！」

「俺が決めたからだよ」

「先生方もこの推薦文を読んだら、快く許可してくれた」

「立海のPRにもなる実績ですからね」

「私立は怖いのが」

そして案の定、観たこともない『真田リリイ』に票は殺到。
幸村の狙い通り、ミスに選ばれたリリイちゃんは……。

校門で兄だけでなく、全校生徒に迎えられた。

「あれが！」

「うお！ マジで美人！」

「格好いい系？」

「真田君に似ているけど、ちょっと優しい感じね」

「あの子ならいいわ」

「山代と比べたら誰でもオツケー」

「年齢詐称気味なのは、兄妹ってとこかな……」

「「プツ」「」」

「今からパレードでもあるんですか、弦兄様」

とりあえず、と兄に弁当を渡しながらリリイちゃんが尋ねる。

「い、いや……」

いつになく歯切れの悪い真田。

「やあ、リリイちゃんv」

「幸村さん、4日ぶりですね」

「そうだね、久しぶり」

「（4日って……何だ？）」

「（部活の後、精市が自宅に寄ったのだ）」

「（そりゃ、リリイちゃん目当てじゃの）」

「実はね、リリイちゃんが今年のミス立海に選ばれたんだよ」

「……あの、私まだ編入していませんけど？」

「そんなの些細な問題だよ。リリイちゃんの生き様に皆心を打たれてね。君を学校の中心として今後ボランティアに力を入れようってことになったんだ」

「そうなんですか！」

リリイちゃんはいたく感動したようだ。

「日本の学生がそれに参加してくれたら、各国の仲間も喜びます」

すごいグローバルなことを言い出した。

気軽に彼女に投票したことが逆に気まづくくなる学生は少なくはなかった。

「学生の身でやれること。ということに着なくなった衣料・使わない筆記用具、食べない使わない贈答品の寄付を中心に行っています。みなさん、ご協力をお願いいたします」

深々と頭を下げるリリイちゃんに「「「いえ、こちらこそっ！」「」」と礼を返す生徒達。

「でも、ミスの件は謹んでお断りいたします」

「なんで？」

幸村の暗黒にもケロリとしてリリイちゃんは明朗に返事をする。
ダークサイド

「ミス立海に選ばれるかたは、品行方正で、やはり愛校心のある方が選ばれるべきです。私は編入予定とはいえ、まだ立海のことを何も知りませんから」

ぐうの音も出ない返答である。

リリイちゃんが断ったことにより、ミスは決めなおしとなったわけだが……。

「品行方正で愛校心って……山代じゃないな」

「あいつ、男遊びはげしいもんな」

「制服は改造だしな」

「生徒会の役員あたりがよくねえ？」

という会話が男子の中であり、生徒会書記の宮野さん（女子に好かれるタイプ）が選ばれました。

リリイちゃんといえば……。

「彼女はクイーンだよな」

「ミスとか、ちょっと格が、な」

「女帝ってカンジ。皇帝・真田君の妹だし」

「クイーンってことにしようぜ」

さらに、リリイちゃんに傾倒した宮野さんが「親善大使はリリイちゃんかふさわしい」ということになり、各校にリリイちゃんがいくことになるのは別の話。

リリイちゃん、女帝になる（後書き）

中身は成人女性ですし、人種の坩堝^{つるぼ}・自由の国アメリカでそこそこ辛酸は舐めています、リリイちゃん。

神の子だって、理路整然と撃破しちゃいますよ。

リリイちゃんと、ボーイフレンド達（前書き）

久しぶりの投稿な上、オリキャラばかり出てきて本当に申し訳ありません。

リリイちゃんと、ボーイフレンド達

アメリカに居る叔母から荷物が届いた。

百合が開けると、その中には、英語の本や洋楽のCD、服やアルバムなどが入っていた。
本を一冊手にとって捲ってみれば、全て英語だ。

「・・・・・・・・英語か？」

『e』という一文字の英語のスペルなどあっただろうか？

「弦兄様、それはイタリア語の本よ。英語なら、これがいいんじゃないかしら」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（パラパラパラ） 百合はどうやって語学を習得したのだ？」

「ボーイフレンドを作るのが手っ取り早いわ」

バリッ

ペーパーブックとはいえ、真っ二つに本を裂いてしまった真田弦一郎15歳。

「妹にボーイフレンドが複数いたのがショックなのか、妹に先を越されたのがショックなのか、どっちだ？」

「百合に恋人が居たことがショックだったに決まっているだろうが！」

柳が指を折りつつ述べた。

「現在リリイちゃんが取得している言語は5・5ヶ国語。うち、日本語と英語は自然に覚えたとして・・・4人か」

「アメリカ人とも付き合ったことあるんじゃない？4人以上だろ。仁王もビツクリの恋愛遍歴ってヤツ？」

「俺はガイジンさんとは付き合ったことないのう。さすが、リリイちゃんはグローバルじゃ」

「なあ」

ジャッカルが首をかしげた。

「ボーイフレンドだろ？直訳したら男友達じゃねえか。ステディとは別なんじゃねーのか？」

「ステディって何すか？」

「恋人という意味だ」

「弦一郎みたいにグダグダ考えこんでいないでリリイちゃんに聞けばいいじゃないの？」

神の子の一声で、一行は真田家にお邪魔し、「リリイちゃんにボーイフレンドが居たことがショックな、ブラコン弦一郎に止めを刺してやってくんない？」と話を持ちかけた。

「弦兄様・・・おっしゃってければ良かったのに」

リリイちゃんは、アルバムをドサッと積み上げて、苦笑した。

「勿論、男友達って意味で使ったんですよ・・・ホラ」

リリイちゃんがアルバムをひらいて見せてくれたのは・・・8歳くらいのリリイちゃんと、黒人の男の子。

「彼はエドアールと言って、フランス系アメリカ人です。私が日本語、エドがフランス語を教えあいました。

今、彼は高校でバスケットをしています。ディフェンスだったかな。身長もうんと伸びていて7フィートにもうすぐですって」

「7フィート??」

「1フィート＝30センチで計算してみろ」

「7かける30・・・210・・・2メートル10う!？」

巨人じゃないっすか！ 赤也が叫んだ。

「で、彼がサルバトーレ。イタリア語を覚えてもらいました。モデルの卵なんですよ。小さいころからスタイルがいいでしょう?」

赤毛の少年を指差してリリイちゃんが言う。

「じゃー、この男の子は? 男の子っていう大きさじゃないけど」
「彼は……ジュリオ。私達のリーダー格で、スペイン語を覚えてもらいました。」

「聞くやつ全員スゲーんだけど」
「リリイちゃんもジュニアでは名前の知れたアスリートじゃからう。そういう人間があるまるんじゃなか?」

「このあたりの男の子の群れは?」
幸村がなお聞く。

「彼らはブートキャンプで知り合った子たちの中で、格闘系の子たちですね」

「頭に刺青しているね(笑)」

「そういう子、結構多いですよ。女の子も……」

アルバムを捲ると、血だらけのシャツをきて、片目をプックリと腫らし、満面の笑みを浮かべて、ゴツツイ少女を肩を組んでいるリリイちゃんが現れた。

「こ、これは・・・」

「試合の後ですね。こめかみにパンチをかすっちゃって。深くなかつたんですが、出血が酷かつたんです。」

「これだと私が負けたみたいな写真ですが、かろうじて勝ちました」

「え！？ このメスゴリラに勝ったのっ！？」

「・・・マルガリーテは私の大事な親友です。・・・アカヤ締めるよ？」

キュッ

「ウッ！ マジでシマルっ！」

結局、真田がグダグダと考えすぎていただけで、友人止まりの男達と言語を教えあっていたらしい。ということだった。

「なんか腑に落ちない」

「俺もそう思うナリ」

幸村と仁王だけが、兄に負けず劣らずブラコンなリリィちゃんの、思いやりからくるウソを見抜いた。

リリイちゃんと、ボーイフレンド達（後書き）

リリイちゃんはエレメンタリースクール（幼稚園）の頃からBFが途切れたことがあります。が、現在フリー。真田に夢中だから

よって、日本男児な真田には言わないほうがいいと判断し「男友達」という言葉に逃げました。

リリィちゃん、編入試験に合格する（前書き）

お久しぶりです。

リリイちゃん、編入試験に合格する

リリイちゃんの編入は二学期からに決まった。

無事に立海大付属中学校の編入試験に合格したのだ。

「とはいえ、国語、古典はギリギリ、日本史は合格ラインのはるか下だったと先生に伺った。

5ヶ国語が堪能であることと、スポーツ実績による、留学生待遇での合格ということだ」

産まれて数ヶ月でアメリカにわたり、アメリカの教育を受けてきたリリイちゃんなので、日本史なんて「ノブナガ・オダ」くらいしか知らないし、古典を読むより中国語のほうが分かりやすいといった具合だった。

今後は補修で、弱点科目を補うことになるという。

「俺も及ばずながら協力しよう」

日本史は得意中の得意である兄にやさしく言われ、リリイちゃんはぎゅっと弦一郎に抱きついた。

リリイちゃん、編入試験に合格する（後書き）

実は話のストックがなくなってしまったのでした。長編（合宿編、ドキサバ編）は中途半端だし……。がんばります。

リリイちゃんと、同じ年の男友達（前書き）

ご無沙汰しました。二日連続で投稿予定です。まず一回目。

リリイちゃんと、同じ年の男友達

「編入前から話題だから、皆知っていると思うが・・・」

「『真田リリイちゃん！！！！』」

生徒がハモった。

「・・・そうだ。皆仲良くするんだぞ」

（・・・同じクラスかよ）

リリイちゃんに妙に苦手意識を持っている赤也だけが苦い顔をした。テニス部の先輩達の関心がリリイちゃんに向いていることが、苦手意識の根っこにあるのだが、本人は気付いていない。

ようするに、寂しいのだ。

同じクラスになったと先輩達が知れば、伝達要員になるだろう。いや、もしかしたら彼らがじきじきにやってくるかもしれない。そして、ついでに自分をからかうかもしれない。

そうだ！ こいつの口から俺のヤバい情報ゲンコッが副部長に伝わる可能性だってある。ということは・・・制裁ゲンコッの回数が増える！

マイナスのことばかり頭に浮かんだ赤也はリリイちゃんを睨んだ。すでに赤也のことは知っているリリイちゃんは、赤也と視線があったので、パチリとウィンクをした。

総合格闘技で相手選手と俗語まじりの罵倒合戦　血まみれの戦いを繰り返していたリリイちゃんにとって、赤也の睨みなど、仔犬の甘噛み程度のほほえましいものだ。

リリイちゃんのウィンクにクラスメイトは悲鳴を上げた。

「ん？　そうか。切原とは知り合いなんだな。よし、隣の席にするか！」

「アカヤ！　宜しくね」

「……………（マジ最悪）」

ホームルームが終わると赤也の席……の横のリリイちゃんの席には人だけが出来た。

「うちのクラスになってくれてラッキー！」

「ねえ、リリイちゃんって呼んでいい？」

「アメリカの中学校ってどんなカンジ？　やっぱり大人っぽいの？」

「英語ペラペラなんだよな？」

「ばっか。フランス語とかもペラペラって（ミスコンのときの）紙に書いてあったろ？」

横の赤也がウンザリするくらいくだらない質問に、リリイちゃんは卒なくにこやかに答えている。

「だーーーーー！！　おい、副部長妹！！　校舎案内すつぞ！」

結局ガマンできなかった赤也がリリイちゃんをつれてクラスを飛び出したのだが・・・。

「おい、あれって・・・」

「テニス部の真田先輩の・・・」

「リリイちゃんだよ」

「うわー。背高い。顔ちっちゃ！」

「脚も長いし、胸もおつきいよ。本当に中学生？」

「モデルみてえ。うちの制服が格好よく見えね？」

ひそひそひそひそひそ

クラスからでも注目の的で、ひそひそひそひそ話され、廊下を進むたびに赤也のイライラ度が増してきた。
そして目も次第に充血してきて・・・。

「Hey、アカヤ！ あと10分しかないよ。とりあえず近いところだけ教えて。あとは昼休みね」

「なんで昼休みも俺が付き合わないといけないんだよっ！」

「日本の中学校は先輩に馴れ馴れしいとイジメられるって聞いた」
「・・・誰だよ、ンなこと言ったの」

違うとは言い切れないが、正解とも言いがたい微妙な問題だ。

「アメリカの友達。まず同じ学年と仲良くなったほうがいいって。私の友達皆年上だから、同じ年はアカヤが初めて」

「だれが！ お前の友達だっ！」

「アカヤー」

「！」

「ああいう質問はツーカー儀礼だけど、ちょっと面倒って思った。助けてくれたから、アカヤは優しい」

リリイちゃんはニッコリ微笑んで赤也を持ち上げ、グルグルまわした。

ちなみに、リリイちゃんは赤也より数センチだが高い。

「やーめーろー！ー！！」

「友達のシルシだよ？ 男友達が出来たら、グルグルするといいつて聞いた。永遠に友達」

そりゃあ、女子に「高い高い」されて恋が芽生える男子は少ないだろう。行つて友情止まりだ。

「おい、いい加減下ろせっ」

「アカヤ照れてる！。大丈夫、重くないよ？」

「おまつ！ 俺に失礼だぞ！」

「うん。ハッキリ言ってくれるほうが、分かりやすい」

そしてリリイちゃんは、「まずはフロアの端からっ！」と、暴れる赤也をもとせず、肩に担ぐと悠々と歩き出した。

その豪快さと怪力に、遠巻きに2人を見ていた2年生もポカンとしてしまった。

リリイちゃんと、同じ年の男友達（後書き）

リリイちゃんは、ヒソヒソ話す2年生ズに対しても「ハッキリ言うてほしい」と暗に示してます。

なので、声は普通より大きめ。

そして、「アメリカの友達」はフラグ折りの為に、リリイちゃんに『日本人の男女友情』を説明しています。

リリちゃん補足・・・胸がデカイ（笑

中学生だし？ とりあえずDで。今後は未定。

ちなみに私はBくらいが良いと思います。デカイと第三ボタンあたりがエラ（エロ？）いことになるし。

リリースちゃん部員?になる(前書き)

連日投稿2日目です。

リリイちゃん部員？になる

リリイちゃんが無事立海大付属中学校の生徒となつてからのこと。

「兄様を待っている間私もトレーニングしていてもかまいません？」
「部員の邪魔をしないなら問題なからう」

そついうわけで、リリイちゃんがテニス部の練習に加わつた。

「いつそ、マネージャーにならないかい？」

テニス部の活動の横で入念にストレッチをしているリリイちゃんを勧誘したのは、部長の幸村。

彼がリリイちゃんを勧誘するのは今回が初めてではない。

兄・弦一郎との帰宅を望むリリイちゃんが部活終了を待つことは以前から多く、それでなくても彼女を気に入っている幸村は彼女へのちよっかいを毎日欠かさない。

キレイな容姿に、二年連続全国優勝の男子テニス部を率いる部長。彼の言動はいつでも目立つ。しかも、ちよっかいをかけている人物が、『あの』真田の妹。しかも帰国子女でフレンドリー・・・という「本当に真田の妹なのか！？」「いやでも顔は似ているし…」と物議を呼んでいる有名人リリイちゃん。

毎日目立ちまくっているので、『幸村がリリイちゃんをマネージャーに勧誘している』という噂、否、事実はあるという間に広まつた。

しかし、当のリリイちゃんはどうと…

「皆さん真剣にテニスに取り組んでいらっしゃるのに、素人の私が参加するわけにはいきません」

と至極最もな理由で、幸村の勧誘を断り続けていた。

が、兄・弦一郎を待つ間、自分が練習中の部員の集中力を欠かせている、と彼女は気づいた。

邪魔をすることは本意ではなく、気づいた当日から彼女は部活終了を待たずに一人で帰ることにした。

そして初日はナンパ男たちに囲まれ警察がくる騒動となり。その次の日は駅前でスカウトされているのを目撃され、さらに一週間後にはスカウト団が校門前で彼女を待ち伏せ。それが噂となり、さらに翌日は見物客が押し寄せ…。

「お兄さんを待つて、帰宅しなさい」

と校長自らリリイちゃんに進言し、一人で帰ったリリイちゃんが気になり別の意味で練習に身が入らなかった兄の現実も問題としてあったわけで…彼女は再び部活を待つ身となった。

が、根本的解決はされていない。やっぱり部活の邪魔をするのはいやだな・・・と思ったりリリイちゃんは、

いつそのこと参加してしまおう。

と思い立った。もともと運動は好きだ。なんたって元格闘家だ。

リリイちゃんは部員（&野次馬）がビックリするような柔軟性でストレッチを終え、部員に混じってランニングを始めた。

校庭十周。一周500メートルだから、5キロという単純計算。部員はダッシュ&ジョギングを繰り返しながら5キロ走破する。ダッシュの距離は人それぞれ。限界に挑み、なおかつ体力を養うのが目的だ。

「ムリは禁物ですよ、リリイさん」

「ありがとうございます、柳生先輩。でも毎日走っていますし、5キロくらい軽いですよ」

「そ、そうなのですか…？」

心配した柳生をよそに…リリイちゃんは完走した。レギュラー並みの時間で。

しかもその後素振りを始めた部員に「もう少し走ってきます」とコートを飛び出していった。

7分後、14分後、20分後。リリイちゃんはコートの前を颯爽と走り去り、25分後にコートに戻ってきた。

「…タイムが縮んでいるな。感心すべき体力だ」

柳がデータブックに何か書き込んでいる。

クールダウン中、リリイちゃんは一人の部員が気になった。足をかばっているように見える。

モジャモジャの黒髪。クラスメイトの赤也だ。

リリイちゃんの視線の先に気づいたのは兄の真田だった。彼もすぐに赤也の異変に気づく。

すぐにトレーニングをやめ保健室へ行くように進めるが、ガンとして拒む赤也。

「悪化してからでは遅いのだ！ 立海レギュラーとして自覚と責任を持って！」

兄の喝で、リリイちゃんは赤也が念願のレギュラーになっていたのだと知る。

捻挫というものは、長引くものだと彼女も経験上知っていた。

「兄様、私がアカヤを保健室に連れて行きます」

「頼めるか、百合」

「勿論です。責任を持って治療するまで見ています」

「へっ！ 副部長の妹だろうが、俺が素直に行くとはおもわねーことだなっ！」

兄に頼まれやる気倍増のリリイちゃん。

「アカヤ、抵抗するなら気絶させてでも連れて行くよ？」

気絶させるのも大得意だし、お姫様抱っこして校庭を横切っ欲しい？」

「……………うつ！」

「そりやいいのう。俺は見てみたいぜよ。お姫様抱っこされる赤也」
「俺も見たいなあ。気絶の仕方もあるし。赤也、ちょっと気絶させてみてよ」

仁王と幸村も集まってきた。幸村は「気絶の仕方」など教わってどうするつもりなのか？ きっと毎日部員を気絶させて遊ぶに決まっている。

「……………行けばいいんですよ」

「あまり動かさないほうがいいから、おんぶする？」

「や、やめてくれよう！」

「でも……………」

「なら、コレで運べばいいだろう」

丸井が部室の横の台車を指差した。

「それはいい方法だな。双方の負担も減らせる。赤也、乗れ」

気絶・お姫さま抱っこ、おんぶ、台車……。この選択肢であれば、誰だって台車だろう。

「……………ちいっす」

しぶしぶ台車に座る切原。リリイちゃんは取っ手をつかむとゴロゴロと運搬していった。

保険医は不器用だった。

シップを縫れさせたただけならご愛嬌だが……。テーピングも縫れており、しかも緩い。

「あれ・・・あれ？」

切原の目が充血してきた。兄に聞いてこれがヤバいと知っているリリイちゃん。

「先生、私にさせてください。テーピングはハードタイプとソフトタイプの二種類出してもらえますか？」

「あ、やってくれるの？　ありがとー」

昔取った杵柄である。

リリイちゃんは関節を固定し、最小限のテーピングでキッチリと固定すると、冷却スプレーと氷の入ったバケツを貰い、再び台車に切原を乗せた。

「・・・テーピング上手いな」

「私もスポーツをしていたもの」

「知ってる。・・・ボクシングだろ？」

「総合格闘技」

「K-1とか、そういうのか？」

「まあ、そういうのもやってた」

「・・・・・・・・・・」

聞きかじった話だと。

交通事故で彼女は目と耳を怪我し、選手生命を失ったという。それまでは「ブラッディ・リリイ」とか「魔界のプリンセス」とか言われる最強の選手だったらしい。・・・そのあたり兄似というより部長似じゃないかと赤也は思った。

赤也はテニスが好きだ。

捻挫したのを隠して練習したいほどに。
でも、捻挫は治る。

けれど、彼女の目と耳は治らない。

実際には目は角膜移植でほぼ完治し、耳は左耳が難聴の気がある程度まで回復している。

彼女は選手としてリングに立てないと言ったほうが正しい。

そこらへんの細かいところは赤也には分からないが、「ものすごく辛いんだろうな」ということだけは分かる。

レギュラー並みに体力があっても、もうボクシングは出来ない。

・・・あれ？ テニスは??

「おまえさー、テニスしてみれば？」

「え？」

「副部長の妹じゃん。運動神経よさそうだし、男並みに体力あるし。」

やってみればいいじゃん。副部長だって喜んで

教えてくれるだろ？ 部長もだし。…おれも教えてやるしよ」

「テニス・・・」

「全然やったことないのか？」

「友達の家でちよっとプレイした程度なら」

「しばらく筋トレくらいしか出来ねえし、俺が教えてやつからよ！」

「え、でも・・・」

「決まり！ 礼はテーピングでいいからな！」

そして。

切原がリリイちゃんにラケットを持たせ素振りさせているところをジャッカルが目撃。丸井にバレる 部員全員に伝わり。

「素振りなんてつまらないよ、ちよつとラリーしてみようか？」

と幸村によりコートに立たされたリリイちゃん。

「ふむ。ボクシング仕込みのステップというのか？ 俊敏さは申し分ないな。動体視力もクリアしている。体力・パワーも女子としては超高校生並みだ」

ガッ！

ギューーーーーッ！

「グボッ！」

「ああっ！？ ジャツカル先輩申し訳ありませんー！」

「・・・問題はボールコントロールだな」

「スイートスポットどころか、枠に当てているぞ」

「すげー音だな。150キロくらい出てるんじゃないか？」

「あ、今度はグリップに当てた・・・」

ゴツ！

ギュルルルル・・・

ガシャッ！！

「フェンスにめり込んでいますね」

「・・・ピヨ」

「リリイちゃん、ラケットの角度が悪いよ。もう少し下を向けて…。
さっきは枠で今がグリップだったから、次はスイートスポットに当てられるよね？」

「コツはつかめたと思いますが…。皆さん流れ玉に注意してくださいっ
いっ」

「フフッ、大丈夫だよ。立海テニス部にテニスボールで怪我するな

んてみつともないヤツはいないから」

だがしかし。

リリイちゃんにテニスのセンスがないと分かるのに時間は掛からなかった。

「そういえば道具を使うスポーツって苦手でした」

「え？ リリイちゃんって実は不器用？」

リリイちゃん部員？になる（後書き）

よし、これでストックが書きかけの「ドキサバ編」と「合同合宿」だけになった！

週末に妄想をカタチにして、来週投稿したい、な。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

第一話以来の、リリイちゃん視点です。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？

嘘みたいですが、遭難しました。

きっかけは「立海男子テニス部合宿」

学校所有の合宿場が老朽化の為立替え中ということで、「今年はどうするべきか？」と弦兄様が頭を悩ませていたので相談を受けたこと。

「百合は日本に来てまだ間もないし、充てはないだろうが…話を聞いてもらっただけでも違うものだな」

そう弦兄様はおっしゃって、私の頭を撫でてくれたけれど・・・。

「まかせて！ 充てはあります！」

弦兄様の悩みを解決して差し上げたい！ と思っ^たし、本当に充てがあつたの。

私は兄様の前で「山本さん」に連絡をした。

『リリイ様でいらっしゃいますか？』

「はい、お久しぶりです山本さん。ご主人はいらっしゃいますか？」

『あいにくまだ戻ってきておられません。私でよければ言伝^{ことづて}をしておきますが？』

「たすかります。タローさん、国内に保養所を何箇所かお持ちとうかがっていました。単刀直入に申し上げますと、近場で一つ、一週間ほどお借りできないでしょうか？」

『それでしたら問題はないと思います。常々管理人を在住させているだけで、使い道がないとこぼしておられます故、リリイ様のお願いでしたらご快諾いただけるかと』

「ありがとうございます。テニスコートが2面はある場所がいいのですか？」

『その点もご安心を。タロー様とテニスは切っても切れない仲でございますから』

山本さんは『後ほどタロー様よりご連絡申し上げます』と言ってくれたので、電話を切った。

「百合・・・山本さんやタローさんとは、一体誰だ？」

「ボランティアで知り合った、篤志家なの。私が怪我をしたときもわざわざアメリカまで来てくださったのよ」

「そうか。兄として礼を言わねばならんな」

「もてあまし気味の保養所を貸してくださるって約束してくれたわ。部活の皆様にも連絡してさしあげたらどうかしら？」

「そうだな。あてが出来たと連絡しておこう」

その夜、タローさんから連絡があったんだけど・・・。

「お兄様、ちょっと困ったことが・・・」

「保養所の件がダメになったのか？ 残念だが仕方あるまい」

「そうじゃないの。ちよつと・・・というか、かなり大きいみたいなの」

それでタローさんが、自分の教え子達も呼んで共同合宿はどうかつ

て言ってきたのだ。

私が参加するわけじゃないし、保留にしてもらったんだけど・・・。

「タローさんとやはらは、どこの学校のテニス部の顧問なのだ？」

「ヒョーテー学園とおっしゃっていたわ」

「氷帝！」

あ、驚いている。弦兄様をご存知のところってことは有名なところなのね。

「跡部のところか・・・。あの学校の实力は疑いようがないが・・・。精市と蓮二に相談してみるか」

「兄様、ヒョーテーとセイガクはどちらが強いのか？」

「どちらも全国区の学校だが・・・百合、お前・・・」

「あのね、兄様。保養所は50人は収容できるんですけど。コートも8面あるらしいの。この間国光さんに聞いたんだけど、セイガクのテニスコートは整備中で使えないんですって。誘ってみたらどうかしら？」

「・・・ふむ」

弦兄様が部活の方に連絡をし始めたので、私も国光さんに電話してみることにした。

「立海と氷帝との共同合宿？」

「そう。期間は一週間。どうかしら？」

「こちらは願ってもないことだが・・・。関係のない俺たちが参加してもいいものなのか？」

「試合で逢ったことがあるのでしょうか？ 問題ないと思います」

日本人って謙虚ね。

そうして合宿が決まったのだけど……。想定外なことに私も参加することになってしまった。

「氷帝の監督を動かした百合が行かないのは本末転倒だろう」

そう弦兄様に言われたし……。確かに退院してからご挨拶すら伺っていないし……。行くべきかも？

そして集合場所の東京湾で私たちは豪華客船に乗せられて目的地に向う予定。

……。近場って国内よね？ パスポートは用意していないんだけど・

「ミス・リリイ！」

「ミスタ・タロー！」

港で。私は久しぶりのタローさんとの再会。彼の広げた腕に飛び込んだ。

「元気そうで何よりだよ、ミス・リリイ。病室の君を見たときどれ

ほど胸を痛めたか・・・」

「心づくしの見舞いの品、ありがとうございましたミスタ」

「私のことは昔と変わらずタローと呼んでほしいね。犬のタローはどうした？」

「ごめんなさい、日本にはつれて来れなくてあちらの友達に預かってもらっているの」

「・・・そうか。それは寂しいことだな」

再会の挨拶が終わったなら、弦兄様を紹介する。と言っても、二人ともお互いにご存知だったみたい。

『君が』『あなたが』とか驚いていたし。

弦兄様がタローさんを部活の方に紹介しているのを見ていたら「おい」と声を掛けられた。

振り返ると、とてもキレイな男の子。・・・というか見覚えが。

「あの時の・・・」

「ブラッディ・リリイか！」

いやだわ。あの呼び名がヒョーター学園に流通しているなんて。

「真田リリイです。リリイと呼んでくださいね？」

シェイク・ハンドでご挨拶していると、メガネの男の子やおかつぱの男の子やらが集まってきた。

やっぱり、全員見覚えがあるんだけど？

「姫さん、久しぶりやな」

「クソクソ！お前ちつとも連絡しねーじゃんかよ！」

「っーか、誰か連絡先教えてんのかよ？」

「ひつ久しぶりだねリリイちゃん！」

「ウス」

「話に割り込むな！！！」

皆さんと一通り再会のご挨拶をしていたら、キレイな男の子がキレイだ。・・・ああ、跡部君って名前だったわね。

「監督と知り合いか？」

「元スポンサーで、今でも親しくさせていただいているわ」

「監督は、ボクシングにも興味があつたのか・・・」

「ボクシングもしていましたけど、総合格闘技です」

ここ、大事ですから。私はどちらかというとキックボクシングから派生して総合格闘技に入ったのだし。

「あそこに見えるんは、姫さんのお兄ちゃんやな」

メガネの人・・・オヒタシ（違う）さんが弦兄様をみて呟いた。

「皇帝真田の妹とか、今でも信じられへんわ」

「ええ。私もあんなすばらしい兄様の妹だなんて、自分の幸運が信じられません」

「「「・・・・・・・・・・」」」

「おい、本気か」

「高度な笑いやな。関西人も突っ込めんわ」

「リリイってブラコンか？」

（（（真田の妹がブラコン・・・）））

ヒョーテの方たちがザワザワしているのを無視して、弦兄様の頼もしい背中をみていたら、年上の友人を発見。

「あ、国光さん！」

「「「国光さん（だと）??」」」

白と青を基調としたジャージの中に国光さんを見。
ヒョーテの皆さんに『それでは、また』と挨拶すると彼のほうへ向かった。

「リリイ、今回は招待してくれて感謝する」

「お礼の先が間違っているのでは？」

「そうだな。榊監督にも改めて言うつもりだ」

相変わらず気難しい顔をした国光さんだけど、彼のデフォルトだし、気にしない。

彼の肩越しに学校のメンバーらしき人と目があつたので、水を向けた。

「副部長の大西だ」

「はじめまして、大西です。君は真田の妹さんと聞いたけれど・・・」

「ええ。真田リリイと申します。今回の合宿には無関係なんです、ご一緒することになりました」

「関係者じゃないのに、参加してんの？」

ボソッと言ったのは小さな子。

白い帽子に大きな目……。

「ジュニアテニスのエチゼン？」

「……なんで俺を知ってんの？」

「ワシントンで一緒にしたじゃない。忘れちゃった？」

「……リリイじゃん」

あ、思い出してくれたみたい。

「久しぶりね。日本に来ているなんて知らなかったわ」

「そっちこそ。テニス始めたなんて知らないし」

「怪我で引退しただけよ。テニスはルールも知らない」

「……ふーん。ま、あんたなら邪魔にはならないよね」

「相変わらずビッケノーズね。エチゼンは」

「リヨーマでいいよ」

「そう？ エチゼンって発音気に入っているんだけど」

「あんたがリヨーマって言わないと、俺もリリイって言いにくいじやん。兄貴も居るみたいだし」

「それもそうね」

「なににー？ おチビと知り合いー？」

頬にバンソウコウをつけた可愛い男の子がリヨーマに飛び掛ってきて話に乱入してきた。

「アメリカで、昔」

ジュニアアスリートのパーティがあつて。日本人少なかったし、なんとなく声を掛けたのよね。

リヨーマの短い返事に補足するとバンソウコウの子（菊丸さんと言うらしい）が、「フニャー」と相槌を打った。・・・ネコ語？

「ねえそれってテニスじゃないんでしょう？」

「テニスは軽くしか・・・」

「軽く、つてことは初心者じゃないんだ？」

「ほぼ初心者よ。知人の別荘で何回かプレイしたくらいだもの」

「あとで確認してあげるよ」

リヨーマは相変わらず偉そうね・・・。

全員に挨拶を済ませると、私はもちろん弦一郎兄様のところへ戻った。

「挨拶は済んだのか？」

「はい、弦兄様。皆さんフレンドリーな方ばかりで安心しました」

「あははは。リリイちゃんにケンカ越しなヤツがいたら、俺がそれ買うから」

「リリイちゃんは美人さんやき、別の心配せんといかんぜよ」

「おう、あんまり一人きりになるなよな！」

弦兄様のお友達はみなさんステキな人ばかりです。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

ネタ切れのため、途中までですが投稿しました。

あまり増やすと収集が付かないため、ドキサバ編は立海・氷帝・青学のみとさせていただきます。

トリップ前のリリイちゃんは20代のため、中学生の王子様達を見ても「キレイ」「カワイイ」と感じてしまいます。

真田弦一郎にたいしては「ステキ」「キセキ」「ギフト」と存在を絶賛しています。超ブラコン。

12/22訂正：手塚の「リリイさん」呼びを「リリイ」に変更。
違和感があつたので。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

ドキサバといえば、女子2人・・・。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？

「マネージャーの広瀬だ」

「ひろせしずか広瀬静です。宜しくお願いします」

女子一人じゃ居づらいだろうという、国光さんの気遣いで青学からはマネージャーも参加しています。
私と同じ中学2年生だそうです。

「真田リリイです。同じ年だから敬語は使わないでね」

「お、同じ年！？」

「見えないけど、そう」

「悪い意味じゃなくなつて！ 大人っぽいからうらやましいなつてっ
！！」

「かわいい。国光さん、この子どうやって勧誘したの？ ナンパ？」

「ぶ、部長がナンパ！」

「……違う。越前の彼女だ」

リヨーマのガールフレンド！！！！

真っ赤になっている広瀬さんを私は微笑ましく思った。

あのクールボーイにガールフレンドかあ。

「改めて、私のことはリリイって呼んでね。貴女のこととはシズカ？

シズカちゃん？」

「あ、静でいいで・・・いいよ。私はリリイちゃって呼ばせてもらっていいかな？」

「モチロンだよ。あとね、年上以外は呼び捨て主義だから、リヨーマって呼んでいるけどジェラシー感じちゃうタイプ？」

「うん。大丈夫」

「ありがとー。リヨーマだけじゃなくて、立海の切原も呼び捨てにしているし、本当に気にしないでね」

「うん」

「シズカ、かわいい。ね、国光さん」

「・・・・・・それについての発言は拒否させてもらおう」

そうだね。「かわいい」って言ったらリヨーマが大変だし、ウソでも「かわいくない」って言ったらシズカに失礼だものね。

「それじゃあ、私は？　かわいい？」

「リリイはかわいいというより、美人だろう」

「Thanks！　国光さんはハンサムだよ」

「・・・・・・」

私のコメントに、「発言を拒否」した国光さんの照れたような困ったような顔に自然に笑みが浮かぶ。

シズカは国光さんのそういう側面になれていないのか、始終ビツクリした顔をしていた。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

リョーマのガールフレンドにしました。 静ちゃん。

彼女はドキサバヒロインではなく学プリヒロインですが、私のエコヒイキで登場させました。 梓真ちゃんもかわいいけどね！ 彼女よりはお兄さんを出したい。

リリースちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

連続更新予定1日目です。感想をいただけると調子こいて更新記録が伸びるかも？

リリイちゃんとドキドキサバイバル？

航海日和だと思われた空は、夕方になると真っ黒な雲に覆われてきた。

「嵐でしょうか？」

甲板に出て空を気にしていた俺に、後ろから百合が声を掛けてきた。

「うむ……。が、船長が知らずに出航したとは思えん。航海に支障はないはずだ」

「一応、どのくらい荒れそうなのか、タロウさん経由で伺ってみますね」

我が妹ながら、百合には才色兼備という四文字熟語がふさわしい。

国語・日本史・古典はからきしだが、その他は学業優秀。

道具を使った競技は不得手だが、運動神経も秀逸。

機転もきき、ユーモアもあり、料理上手だ。

（正しくは、真田弦一郎に比べればユーモアがあり、真田弦一郎の好物である味噌汁と焼き肉だけはマスターレベルなのである）

こんなにすばらしい妹がいる事実が今でも信じられない。

・・・と、ちょうど近くにいた跡部に言ったところ「……………お前ら、似たもの兄妹だな」と返された。どういう意味だ？

さておき、しばらくすると百合が、顔を曇らせて戻ってきた。

「どうした？」

「兄様、甲板は危険なので封鎖するそうです。お部屋に戻りましょう」

「……さもあるうな」

高くなってきた波をチラリと見て、俺は百合とともに甲板を後にした。

「こんなに揺れてちや気になって眠れないよ。ゲームでもしない？」

「あ、俺人生ゲーム持ってきてるっす」

「だから、んなにカバンがでかつたのかよ」

「リリイさん、私とチェスでもどうです？」

「俺も横でみせてもらってもいいか？」

「俺、トランプ持ってきてるっすよ！」

順番に不二、赤也、ジャツカル、柳生、手塚、桃城の台詞だ。

柳生は合宿にチェスを持ってきたているのか。たるんどる！と思ったが、船の遊戯室にあったものらしい。

柳生より人生ゲームを持ってきた赤也を指導すべきだったのだが、百合のこととなると俺も私情を持ち込んでしまうようだ。反省せねば。

百合と柳生。そして、なぜかチェスに興味があるという手塚と（註：リリイちゃんと初めてのお友達参照）、日常からチェスをしていそうな跡部がチェス盤に集まっている。

手塚とは祖父経由で友人になったらしいと聞いている。

・・・・無口で鉄面皮の手塚と友誼^{ゆうじぎ}が結べるのか？と心配したが、百合の生来^{せいらい}の親しみやすさで、上手く交友しているようだ。

跡部のほうとも、驚いたことに顔見知りらしい。なんでも鳳が困っているところに偶然通りかかり手を貸したことが切欠^{きつかけ}だという。（註：リリイちゃんと救世主伝説参照。リリイちゃんはチンピラに頭突きをかましたことは伏せています。跡部とは口裏合わせ済）

「ルールは将棋に良く似ているんですよ」

柳生が手塚に説明をしている。

「一番の違いはチェスが消耗戦つてところだな。捨て駒はよくよく考えないとダメだ」

「キングをキャスリングして、ビショップやポーンで戦うのがセオリーでしょうか？ポーンとキングはこう……。ナイトは……。こう。ルークは……。こう。ビショップは……。こういう動きが出来ます」

百合が盤上で駒を動かして説明しているようだ。

「・・・分かった気がする。1試合見せてもらってもいいか？」

「リリイと柳生がどんな戦法を使うか見させてもらっぜ」

俺がなんともなしに彼らのやり取りを見てみると、赤也が俺に声を掛けてきた。

「副ブチョー。人生ゲームやりませんか？」

青学から越前とマネージャーで、氷帝から宍戸さんと鳳。ウチからは俺と副ブチョーで6人っすよ。

常勝立海！としてはたかがゲームでもワンツーフィニッシュが当然っすよね」

「無論だな」

「俺は見学させてもらおうか。．．．ここにミキサーがあれば特性乾ドリンクを罰ゲームに使えたのだが．．．残念だ」

「．．！（ビクッ）」

乾の台詞に青学の2人が青ざめた。．．．よほど効果のある罰ゲーム用のドリンクなのだな。

今度赤也が悪さをしたときに飲ませるために作り方を聞いておくのも良いかもしれん。

（赤也大ピンチ！）

そしてゲームが始まったわけだが．．．。

「プッ。副ブチョー。早速結婚すか」

「．．．．．」

「真田サン、連続双子出産っすね。おめでとーっす」

「・・・・・・・・」

「あつ、真田さん離婚ですね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・真田。お前ゲーム運無いな」

「・・・・・・・・」

結婚・出産（連続双子）・離婚・交通事故・会社倒産と続いたところで、穴戸が俺に止めを刺した。

「ゲームで不運を使い果たしたんですから、このあとはいいことばかりですわよ、弦兄様」

いつの間にか後ろでゲームを見ていたらしい百合が俺にフォローを入れた。

「そうだな」

「ええ」

チェスのほうはどうなっているのかと思えば、手塚と柳生が長考状態に入っているようで、跡部はババ抜きで忍足のカードを見てせせら笑っており、百合は俺の元へ来たらしい。

「ちょ、跡部！ ジャマせんといて！」

「あまりにももち札が多くて顔が緩んだ」

「あ、忍足がババ持つてるっばい？」

不二がポソリと呟くと、忍足の横の仁王がニヤッと笑った。

「俺んところにはババ無かったき、ずーっともつとるんじやる？」

「ノーコメントや！」

「語るに落ちてるよ、忍足」

精市が忍足からカードを抜き、ニツコリわらって2枚を捨てた。

「すごいね、幸村。残り1枚じゃないか」

あちらでの不運は忍足のようだ。

そのうちに揺れがひどくなってきた、まずチェス盤のコマが倒れた。

「あっ！」

「・・・もうチェスの続行は厳しいな」

「人生ゲームもコマから車がはみ出ますね」

「つつーか、今嵐のド真ん中ってヤツじゃねーのか？」

「ウブッ！揺れがすごくてコーヒー鼻に入った」

「きたねえな、ジャッカル。近寄るなよ」

そして嵐はどんどんと酷くなり、桝監督が現れ、俺達は救命道具を身につけ、救助ボートに乗ることになった。

俺は百合の手をしっかりと握り、まず妹をボートに乗せ、赤也、3年レギュラーを確認すると幸村と一緒にボートに飛び移った。

他の学校のメンバーも無事に救命ボートに乗り込めたようだ。細切れだが叫び声でそれぞれの安否を確認しつつ、俺達はボートの上で身を小さくしながらひたすらこの嵐が通り過ぎるのを待った。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

げんたろうは、将棋 チェスという流れで覚えました。脳内で将棋ルールを変換しつつ指したので、あまり楽しめなかったよ。でもチェス出来る人って格好よくね？

人生ゲームは随分やっていないので、倒産・破産とか離婚があるかは知りません。テキストですいません。

遭難のあたりの文章は自分でも「ナンダカナー」と思っんですが、ドキサバでも「ナンダカナー」と思ったので、ツルっと流しました。適当でごめんなさい。

船の遭難とか「タイタニック」と「伯爵令嬢」（古！）くらいしか知識ないんだもん。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

連続投稿二日目ー。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？

乗組員とタローさんと、青春学園（不思議なネーミングだけど、日本では普通なのかしら？ 違うよ）のスマレさん（そう呼べと言われた）が居ない。

おそらく皆さん船に残ったと思われます。

あの大きな船が沈没するとは思えないので、きっと無事でしょう。

だって、私達の救助ボートが一艘も転覆しなかったくらいですから。間違いなくあちらに残ったほうが生存率が高いと思います。私達はなぜ救助ボートに乗せられたのでしょうか。

火事でもあったのかしら……。

ともかく、結果として無人島らしき場所に漂流しました。皆さん無事です。

暗闇の中、ボートに大荷物がボンボンと落とされていたのは分かっていたのですが、朝になってスポーツバックとテニスラケットと気付いたときは、冗談かと思いました。

ボートの中でテニスが出来るわけもないのに。

でも、この無人島ならテニスが出来そうですね。……テニスより先にすることはたくさんあるんですけど。

私達は、ともかく開けた場所に行こうということになり、山道といつか獣道を歩き始めました。

季節は夏。雨水や海水で濡れた服はすぐに乾きましたが……。潮しおで体中がパリパリしてきました。

海水を肌に残しておく、トラブルになりかねません。歩き始めてすぐに小川を見つけたので、身体を洗おうという話になりました。

「女子は上流！ 男子は下流だ！」

弦兄様が頼もしく指示を出してくれます。

「そうだね。除きしないようにお互いでお互いを見張っておくから安心していいよ」

「あまり深いところにはいくなよ」

私はシズカと一緒に少し上流まで上り、そこから下流に向って声を掛けました。

声を掛け合うことで、双方無事であることをアピールするのです。

「つ、つめたいっ！」

「まず、バッグの中のタオルをキッチリあらって干しておこう？ 身体を洗うのはその後だね。冷えちゃうし」

「だね。バッグの中身、全部濡れちゃってるー」

「携帯もダメ？」

「携帯はビニールポーチに入れていたから……。時間だけは分かる。今9時25分」

「充電切れちゃうから、電源落としておいたほうがいいよ」
「そうする」

私達は下流にも聞こえる声で会話をしながら身繕いを終えた。

その後弦兄様たちと合流した私たちは、獣道をさらに登る。

けっこう急勾配でシズ力は大丈夫かな？と思っただけど、リヨーマがフォローしているみたい。合わない間に頼もしくなっただね。

私のこともいろんな人が心配してくれたけど、登山やガールスカウトで山道は慣れているし、一晩の徹夜でへばるほどヤワな体力じゃない。

というか・・・リヨーマはシズ力を他の男子におんぶされなくなっただけなので、私とリヨーマが交互にシズ力をおんぶすることになった。

傾斜40度レベルでは周囲に手を貸してもらったり、仁王さんがどこからともなく杖を探してきてくれたりで、それほどの負荷なく進むことが出来ました。

それにほぼリヨーマがおんぶしたし。文句言っただけはリヨーマなんだから当然だよな。

「おなじ女の子なのに・・・。ごめんね、ごめんねっ」

「気にしないで。私、シズ力の10倍は体力あるから」

「・・・うん、ありそう。でもごめん。」

「リヨーマのヤツがグチグチ言わなけりゃ俺らがおんぶするんだけ

どよ。マジでごめんな真田さん」

急傾斜で手を貸してくれたモモシロ君が眉を下げてそう言ってくれた。

「同じ年だし、リリイでいいよ」

「そっか？ 俺は桃城でいいぜ！」

「じゃ、モモで」

「モモっ！？」

「アンタ、本当に大丈夫なのか？」

バンダナの男の子がボソリと聞いてきた。

「平気。毎日20キロ走っているし、夏はガールスカウトで冬は雪山登山もやってたし、その荷物に比べたらシズカは軽いよ」

「すごいな。俺も朝、走りこんでる」

「家が近所ならすれ違つかもしれないね。実際はムリだけど。・・・私のことはリリイって呼んで？」

「俺は海堂だ。海棠薫」

「カオ・・・」

「海堂と呼んでくれ」

「・・・わかった」

ファーストネームが好きじゃないのかな？

あとで兄様に聞いたら、「カオル」という名前は女性にも付けられる中性的な名前だから、それがイヤなのだろう、とのことだった。・・・思春期ですものね。

二時間も歩くと開けた場所に出た。

ありがたいことにコテージのようなものである。

「ここなら上空からも見やすいな」

「拠点つてことでええんちゃう？」

「マジ疲れた」

「アホか！ お前よりリリィちゃんのほうが疲れてるつつの！」

「ごめんね、リリィちゃん」

「大丈夫だよ、あと5往復できるくらい元気げんき」

「・・・って言ってるっすよ」

「まあ、真田の妹だからな」

「越前は・・・ヘバってるっすね。・・・プツ」

部長メンバーの3人が管理人室のようなひとときわ大きなコテージに入り、しばらくすると数冊の本を持って戻ってきた。

島の地図らしきもの。

きこの図鑑と野草図鑑がそれぞれ3冊。

管理人室には賞味期限ギリギリの調味料が大量と、ジッポライターが数本。あと、ろうそくが大量にあったという。

この島の自生植物が食べられるのであれば、しばらくは飢えることはなさそう。海もあるし、川もある（先ほど小川で見たが、魚が泳いでいた）。

私達は開けたこの場所にのろしを作る担当。 図鑑片手に植物を採取する担当。 海で魚を釣る担当。 島を探索する担当に分かれ、サバイバルの準備を始めた。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

ドキサバってストーリーが何種類があったよねー。

さすがに恐竜が出てくるやつはチョイスする気はないけど・・・オ
リジナルで締めようか思案中です。

リリイちゃんに対する補足：（うすうす気付いていたでしょうが）
体力バカ

リリイちゃんのドキドキサバイバル？（前書き）

連日投稿ーっ！

そして視点は、半？オリキャラの静ちゃん。

リリイちゃんのドキドキサバイバル？

「女子は好きなものを選ぶ」

「「「「だな」「」」」」

ということ、私とリリイちゃんは好きな担当を選んでいいと言われました。

今までリリイちゃんとリョーマ君におんぶされてきた私なので、狼^の煙担当にさせてもらうことにしました。
小枝くらいなら、拾えるもの。

リリイちゃんはウーン？と首をかしげていましたが、島の探索班を選びました。い、一番ハードそう。
曰く『私が島に詳しくなったら、男子とは行きにくいところに行けるでしょ？』とのこと。考えているなあ。

狼煙の担当は青学では私とリョーマ君と乾先輩。氷帝では樺地君と鳳君。立海では柳生さんと切原さん。

乾先輩と柳生さんが狼煙の設計図を地面に書き、大きなものを樺地君率先で積み上げると、小枝をたくさん拾ってきてその上に積み上げた。

どんどん燃やすから小枝は多いほうがいいので、狼煙から少し離れた場所に小枝をたくさん積み上げることにした。

切原さんが枝打ちを管理人室の裏から見つけてきたので、周囲のヤブを払うことになった。怪我の原因にもなるし、払ったほうがいいんだって。

平地での作業だけど、結構な重労働でヘトヘトになったところ、他のメンバーも戻ってきた。

たくさんのキノコや野草。見た事ない大きな魚。食事は大丈夫みたい！

リリイちゃんは、山歩きで見つけたというレモンとはちみつをお土産に持ってきた。

「はちみつって・・・蜂の巣から獲ってきたの？ あぶないじゃない！」

「大丈夫だったよ。養蜂家に、課外授業でコツ教えてもらったことがあるし。ハチミツレモンが作れるよ」

「ああ、くやしいが百合の手際は見事だった」

「リリイに危険なことをさせるわけには行かねえからな。コツは掴んだ。器用そうなヤツに仕込むから、明日からは男の仕事にする」

氷帝の跡部さんがそう言ってくれて、わたしはホッとした。

リリイちゃんは、同じ年とは思えないくらい大人っぽくて、美人で、頼もしくて、強くて、優しくて・・・本当にステキな人だ。キレイな白い肌にかすり傷一つだっけつけて欲しくない。

（半年ほど前までは、血まみれで試合をしていたのだが、静ちゃんはまだ知りません）

「はい、シズカ。あ〜ん？」

リリィちゃんが、人差し指についたハチミツを私の口元に近づけてきた。

ものすごく恥ずかしかったけど、私は彼女の指をパクリと口に含んだ。

リリーちゃんのドキドキサバイバル？（後書き）

リョーマだってヤツタコトナイヨ！！（笑

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（前書き）

まさかのジャッカル視点（笑

リリイちゃんとドキドキサバイバル？

俺は、どう考えても山菜獲りだろ。

そして案の定ダブルスを組んでいるブン太も食料係であるキノコと山菜獲りに立候補した。

魚を丸かじりするわけにはいかなーから、こっちにしたんだろうな。

俺は父親が無職だったころ、近所の公園やちっせえ山で食べられそうな葉っぱを筆ってた時があった。

日本の学生じゃ信じられないことかもしれないけど、ブラジルにはもっと底辺の生活をしていたヤツと友達だったこともあった。

だから、俺は恥ずかしいとは思わない。公園で葉っぱを筆るくらいな人もねえ。

ってわけで、オレは食える葉っぱに詳しい。

図鑑で見比べての採集は、不二や桃城あたりにまかせて、俺は「食える」と知っている葉っぱをブチブチと筆った。

「ハラ減ったけど・・・生じゃ食べねえよな？」

「食ったら腹壊すぞ」

「うー。探索チームのほうが良かったか？ でも、あっちは動き回るから更にハラが減りそうだなあ」

ブン太がオレの採集した葉っぱを見つめながら切ないため息をついた。

オレもハラは減っているが・・・こういう緊急事態だ。ガマンして
いるんだぞ？

「海チームは人数が多いし、あつちに期待しろ」

「だなー。立海じゃ、真田と仁王だったか？」

「ああ」

「・・・しかし、真田の妹スゲーよな」

「あのおんぶか？」

「おう。でもって探索チームだろ。俺、真田にベツタリで海チーム
に入るかと思つたぜい。それが青学のマネと一緒に」

ブン太が俺の横に座り込んで、俺の手元を見ながら葉っぱを筆記始
めた。

食べることに直結する作業だから、気まぐれなブン太も真面目に取
り組んでくれて助かるぜ。

「このあいだ、赤也を抱き上げて高い高いしたって話聞いたか？」

ブン太の言葉に、他の山菜メンバーである不二と桃城、穴戸が食い
ついた。

「切原を高い高い？・・・って子供にするアレ？」

不二が聞いてきた。

辞書片手に毒々しい赤いキノコを握っている。

俺が注視していると「食べられるんだって」と図鑑を広げて見せた。

「おう。なんでも友情の証とかなんとか」

「友情？ アメリカってそんなことするんすか？」

「しないだろ。・・・つうか、気の毒にな、切原。同じ年の女子に高い高い・・・」

「それって友達になったら全員対象なのかな？ ってことは手塚も？」

不二の言葉に俺達は、リリイちゃんが手塚を高い高いしているシーンを思い浮かべようとして・・・モザイクが掛かった。
想像力にも限界があるっつーの！！

「そんなカンジはしないけど。・・・鉄面皮の手塚でもあの子に高い高いなんてされてたら、少しは拳動不審になるだろうし」

「さすがに、ねーっすよ。それはねーっすわ」

「俺もそう思う」

「じゃあ、今の所高い高いされたのは切原だけなんだ？」

「おう。女子でもそんな話は聞かねえぜ」

その後、俺達は山菜を摘みながら知る限りのリリイちゃん情報を三人に教えた。

「へえ。格闘技」

「すげー強えらしいぜ」

「見たことねえけどな」

「サングラスしてたのって、そんな理由だったんすか。てつきりオシヤレなのかと」

「言わなくて良かったね、桃城」

「不用意にンなこと言ってたら、真田のゲンコツが飛んできてたぜ」
「あと手塚から、グランド100周くらい言われただろうね」

「それにしても、彼女の試合をもつ見られないなんて残念だな」
「俺らん中では、鳳だったら、頭突きを目の前で見たはずだぜ」
「」「」「頭突き!？」」「」

穴戸の説明に、ブン太が「あー」と言った。

「真田知らねーんだろうなあ」

「これ以上シスコンになったらウゼーから、黙ってようぜい」

リリィちゃんの話をしているうちに持ってきた籠もいっぱいになった。
た。

こんなもんでいいか。

俺達は成果を手にコテージのある広間に戻ることにした。

リリイちゃんとドキドキサバイバル？（後書き）

地の文が少なくなりました。会話文ばかりでごめんなさい。

ストックがなくなったので、明日の更新はムリそうかも。…でもが
んばる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3156y/>

いとしのリリィ

2011年12月29日18時14分発行